

これらの貿易品は、こういった手段で大山寺にもたらされたのでしょうか？

中国の元時代末から明時代にかけて多くの禅僧が中国に留学しています。彼らは中国の文物を多く移入し、中国の情勢をいち早く日本に伝えました。この時期、「じしやぞうえいりやうとうせん 寺社造営料唐船」とよばれる貿易船が朝廷や幕府の許可のもと中国に派遣されました。これは寺院や神社の修造費を得るために派遣された貿易船で、一回の派遣でほぼ百倍の利益があがったと言われており、有力な寺院や神社はそれを仕立てて、直接に中国と貿易を行ったことが知られています。

有名な事例として、韓国の南西側の新安沖で引揚げられた一隻の沈没船があります。この船の積荷は、大量の中国産の陶磁器類でした。一緒に出土した荷札から、一三二三年京都市・東福寺が仕立てた貿易船であることが分かりました。

昨年の広報「だいせん」7月号でもご紹介しましたが、明からの渡来仏・じぞうぼさうはんぎらぞう 地藏菩薩半伽羅像も、このような交易の一環として大山寺にもたらされたものと考えれば説明がつくのではないのでしょうか。また、全国各地から集まる物流システムがあつたからこそ、江戸中期以降に「三大牛馬市」とまでいわれる大きな牛馬市が開催されるまでになつたのではないのでしょうか。

当時の大山寺の交易圏は東アジア規模で広がり、そこには多くの僧侶達の留学が深く関わっていたと考えられます。そして多くの中国文物とともに、最先端の技術や学問や文化が導入されたのだと思います。そのような環境があつて、多くの名僧が大山寺から輩出されたのではないのでしょうか。

(社会教育課文化財調査班)



朝鮮半島産陶磁器



中国陶磁器